

．調査結果の概要

1 ．調査回答者の属性

回答者 499 名の属性について、「年齢」は、18 歳から 35 歳までであり、20 歳代の回答者が全体の 79.2%である。「性別」は「女性」54.3%、「男性」45.7%となっており、女性がやや多い傾向にある。「職業」は「勤め人（正社員や公務員・公社等の正規職員）」45.1%、「パートタイマー等」16.4%、「学生」16.4%となっている。「最終学歴」は「大学」49.9%、「高校」21.2%、「専門学校」13.8%となっている。なお、「亡くした家族」については、「親を亡くしたケース」191 名、「兄弟姉妹」313 名となっており、兄弟姉妹を亡くしたケースが多くなっている（親と兄弟姉妹の両方を亡くしたケースがあるため、合計は全体と一致しない）。

図表 6-1-1、図表 6-1-2、問 1 図表 6-1-3、問 2 図表 6-1-4、問 6 図表 6-1-7

2 ．家族が亡くなったことの説明について

ここでは、家族が亡くなったことについて受けた説明についての主な結果を記載する。

（1）説明の有無

家族が亡くなったことの説明は、全体の 67.9%が「説明を受けた」と回答しているが、説明を受けなかった・受けたかどうかわからない者（「説明を受けなかった」「幼かったため、説明を受けたかどうかわからない」の合計）が 32.0%となっており、家族が亡くなったことについて、説明を受けていない・受けたかどうかわからない者も 3 割程度いることがわかる。

問 9 図表 6-2-1

（2）説明についての納得の有無

家族が亡くなったことの説明を受けた者を対象に、説明について納得いくものだったかどうか質問したところ、53.7%が「納得がいくものだった」と回答しているが、「納得がいかなかった」とする者（「あまり納得がいかなかった」「全く納得がいかなかった」の合計）も 46.3%にのぼっている。

「納得がいくものだった理由」としては、「亡くなったことをはっきり説明してくれた」「落ち着いて話をしてくれた」「幼い子どもにもわかるように説明してくれた」といった理由が多い。他方、「納得がいかなかった理由」としては、「何を説明されているのか、わからなかった」「疑問に思うことに答えてくれなかった」ことをあげる者が多かった。事故後の説明については、落ち着いて子どもにもわかりやすい言葉を使いながらはっきりと説明し、子どもが疑問に思うことには答えることが期待されていることがわかる。

問 13 図表 6-2-5、問 14 問 15 図表 6-2-7

3．周囲の対応

ここでは、周囲からの対応について、助けになった対応と不快な対応の主な結果を記載する。

(1) 周囲からの助けになった対応

事故後、周囲や友人、家族からの助けになった対応について質問したところ、「友人が前と変わらず接してくれたこと」「事故後、家族や親戚など、誰かが付き添ってくれたこと」「周囲が事故のことに触れずそっとしておいてくれたこと」「自分の悲しみや不安などを家族に相談できたこと」「家族で故人の思い出などを話したこと」といった対応に助けられやすい様子が示されている。事故後の周囲の対応としては、友人には事故前と変わらず接してもらおうこと、周囲からは事故について触れられないこと、さりげない支援・付添いに助けられるようである。また家族の対応としては、子どもの悲しみや不安などを相談できるような関係を構築することや、亡くなった家族の話を共有することなどが有効であることが示されている。

問 17 図表 6-3-2

(2) 周囲の不快な対応

事故後、周囲や友人、家族の対応で不快に感じられたことについて質問したところ、「周囲から頑張れと言われた」「周囲から年齢以上の役割を求められた」「周囲から慰めるようなことを言われた」といった対応が、特に不快に感じられやすい様子が示されている。自由記述からも周囲から「頑張れ」と言われることや、「長女なのでしっかり」「亡くなったお父さんの分まで」といった対応に、不快な思いをしやすいことが指摘されている。

問 19 図表 6-4-2

4．心身の困難さや行動面の変化

ここでは、「心身の困難さや行動面の変化(「気持ちの面での困難さ」「身体面での困難さ」「行動面の変化」)」についての主な結果を記載する。

(1) 事故後感じた「気持ちの面での困難さ」

事故後に感じた「気持ちの面での困難さ」について質問したところ、「自分が頑張らなくてはという気持ち」「将来についての漠然とした不安」「そっとしておいてほしいという気持ち」「遺された家族も死んでしまうのではないかという気持ち」といった気持ちを感じやすい様子が示されていた。特に「自分が頑張らなくてはという気持ち」は全体の72.4%が肯定しており、交通事故で家族を亡くした子どもに起きやすい気持ちであると推察される。

また、因子分析及び平均値の検討結果から、交通事故で家族を亡くした子どもは「自分が頑張らなくてはという気持ち」「将来についての漠然とした不安」といった不安・焦燥感を持ちやすい様子が示されている。このような不安・焦燥感について亡くした家族別に比較したところ、親を亡くしたケースの

ほうが兄弟姉妹を亡くしたケースよりやや強い傾向が示されていた。

問 33 図表 6-5-1、図表 6-8-2、図表 6-8-3

(2) 事故後感じた「身体面での困難さ」

事故後に感じた「身体面での困難さ」について質問したところ、「眠れなくなった」「気力や意欲、物事への関心がなくなった」「体調が悪くなった」「疲労感が強かった」といったことは、過半数にあったと回答されており、このような身体面での困難さは、交通事故で家族を亡くした子どもにとっては、起きやすいことと考えられる。このような身体面での困難さについて亡くした家族別に比較したところ、兄弟姉妹を亡くしたケースのほうが親を亡くしたケースより、やや起こりやすい傾向が示されていた。

問 37 図表 6-6-1、図表 6-8-5、図表 6-8-6

(3) 事故後経験した「行動面の変化」

事故後に経験した「行動面の変化」について質問したところ、「気持ちが落ち込んでしまうことがあった」「何かをする気力がでなかった」「勉強や仕事に集中できなかった」といった回答が多く、そのような行動面の変化が出やすいことが示されている。

また、因子分析の結果から、上記3項目は気力面の低下を表す項目としてまとめ、平均値が高い様子が示されていた。家族が亡くなることにより、気持ちが落ち込んだり、気力が出なかったり、勉強や仕事に集中できないといった気力面の低下は、交通事故で家族を亡くした子どもに起こりやすいことと推察される。

問 41 図表 6-7-1、図表 6-8-8、図表 6-8-9

5. 情報支援の取得状況及びニーズ

ここでは、「心身の困難さや行動面の変化」に関する情報の取得状況及びニーズについての主な結果を記載する。

(1) 「心身の困難さや行動面の変化」に関する情報

「気持ちの面での困難さ」に関する情報は、全体の 53.7%が必要と感じていたが、十分に情報を得られたとする者はそのうち 10.1%となっており、必要性を感じていながら十分に得られた者は1割程度である。

問 35 図表 6-9-1、問 36 図表 6-9-2

「身体面での困難さ」に関する情報は、全体の 46.5%が必要と感じていたが、十分に情報を得られたとする者はそのうち 14.2%となっており、必要性を感じていながら十分に得られた者は1割程度である。

問 39 図表 6-9-3、問 40 図表 6-9-4

「行動面の変化」に関する情報は、全体の 44.3%が必要と感じていたが、十分に情報を得られたとす

る者はそのうち9.5%にとどまっており、情報を必要とする者にとって得にくいことが示されている。

問 43 図表 6-9-5、問 44 図表 6-9-6

このような「心身の困難さや行動面の変化」に関する情報について、誰から情報が得られることがよいかについて質問したところ、「親」「同じような経験をした仲間」「学校の教師」等から得られることが希望されている。「心身の困難さや行動面の変化」についての情報は、特に、親や同じ経験をした仲間、教師といった対象を経由して得られることが期待されている。

問 46 図表 6-9-8

(2) 「家族関係や友人関係に悩んだときの支援」に関する情報

「家族関係や友人関係に悩んだときの支援」に関する情報について、「相談機関」や「スクールカウンセラー」「自助グループ」の情報が必要とされやすいことが示されていた。また、必要だった者のうち、情報を得られなかったとする者はそれぞれ42.2%、38.1%、42.9%となっており、必要な相談先の情報が不足している傾向が示されている。

問 27 図表 6-10-1、問 28 図表 6-10-2

「家族関係や友人関係に悩んだときの支援」に関する情報について、誰から情報が得られることがよいかについて質問したところ、「同じような経験をした仲間」「学校の教師」「親」等から得られることが希望されている。家族関係や友人関係に悩んだときの支援についての情報は、特に、同じ経験をした仲間、教師、親といった対象を経由して得られることが期待されている。

問 30 図表 6-10-4

(3) 「学業」に関する情報

「学業」に関する情報について、「授業料免除・減額」や「奨学金」「同じような境遇にあった先輩の工夫」「希望していた進路につけないことへの対処」といった情報が必要とされやすいことが示されていた。また、亡くした家族別の分析では、特に「親を亡くしたケース」において、そのような情報の必要性が強い傾向にあり、必要な情報が取得できたかどうかについては、「同じような境遇にあった先輩の工夫」「希望していた進路につけないことへの対処」といったことに関する情報が不足している傾向が示されている。

問 21 図表 6-11-1、図表 6-11-2

「学業」に関する情報について、誰から情報が得られることがよいかについて質問したところ、「学校の教師」「親」等から得られることが希望されている。学業の情報は、特に教師や親といった対象を経由して得られることが期待されている。

問 24 図表 6-11-6

6 . 現在の精神的状態

ここでは、回答者の現在の精神的な状態について、精神的健康状態（K6）及び複雑性悲嘆反応の主な結果を記載する。

（1）過去 30 日間の精神的健康状態（K6）

過去 30 日間の精神的健康状態について、K6¹の結果から検討する。本調査では、精神的健康状態 13 点以上が全体の 37.7%となっており、重症精神障害レベルの方の割合が高い傾向にある。なお、内閣府の犯罪被害者調査において示された結果（内閣府「平成 21 年度犯罪被害類型別継続調査」において交通事故の被害者 434 名のうち 13 点以上が 12.7%）と比較しても、重症精神障害レベルの方の割合が高いと考えられる。犯罪被害類型別継続調査の交通事故被害者は、遺族の比率が低い（434 名中遺族は 27 名(6.2%)である）ことから単純な比較はできないが、子どもの頃に交通事故で家族を亡くした方には、重症精神障害レベルの方の割合が高い可能性がある。

また、精神的健康状態について、事故後経過期間別に分析したところ、事故後経過期間が短いほど重症精神障害レベルの方の割合が高く、長いほど改善される傾向が示されている。

¹精神的健康状態（K6）の解説については、P107 参照

問 49 図表 6-12-2、図表 6-12-5

（2）過去 30 日間の複雑性悲嘆反応

過去 30 日間の複雑性悲嘆（大切な人を失い、辛く悲しい気持ちや、亡くなった人を追い求める気持ちが、激しく、長く続く状態のこと）について検討する。複雑性悲嘆にかかる 5 項目についての回答を得点化し、複雑性悲嘆反応の得点を算出した結果、5 点以上が過半数を占め、半分は複雑性悲嘆が強い状態であった。そのうち、「複雑性悲嘆に相当する状態」とされる 8 点以上のケースは全体の 6.6%となっており、一部の者は悲嘆が慢性化・常態化している状況と推察される。

なお、「複雑性悲嘆」は、事故後経過期間との関連がみられており、事故後経過期間が長くなるにつれて「複雑性悲嘆が疑われる状態（5～7 点）」は減少する傾向にある。しかし、「複雑性悲嘆に相当する状態（8 点以上）」は 20 年以上のグループにおいて減少する傾向がみられているものの、20 年未満のグループにおいては、4.5%～8.5%にみられており、複雑性悲嘆に相当する状態が 20 年程度継続する者が 1 割弱程度いる可能性が示唆された。

問 50～54 図表 6-12-7、図表 6-12-10